

## あとがき

作年夏、原爆投下から七十一年めを迎えた広島市の平和記念式典に参加してきました。朝の七時半頃、式典が行われる平和記念公園に着くと、すでに多くの参列者の方々が席についており、早朝にもかかわらず、当時は思わぬ真夏のじりじりと焼けつくような暑さを肌に感じました。広島市を訪れたのはこれで二度めですが、式典に加えていただいたのは初めてで、荘厳な、精神が研ぎ澄まされるような感覚を覚えずにはいられませんでした。今立っているこの場所で、人類最初の原子爆弾が投下され、数えきれないほどの尊い命が一瞬にして奪われたという事実は、私の想像をはるかに超える残酷な人的行為であり、共感できる類の出来事ではないと思います。それでも、その場所に立ちそれぞれの方々の霊を弔うことは、私たちが今を生きるものとしてなすべきことなのではないでしょうか。忘れてはいけないと思うのです。伝え続けなければいけない出来事なのです。

ジョーとの出会いからすでに二十数年がたち、さまざまな出来事に思いをはせるとき、時間は必ずしも同じスピードで流れているのではないと感じます。彼と過ごした十四年という

月日は、最初からかなりのスピードで始まり、徐々に加速しながら最後まで走り切ったような、そしてそれは平たんではなく、ローラーコースターのように縦に揺れ続け、彼一人がそのままのスピードで昇天したように思います。その直後の一人残された私といえば、いきなり糸がぶつ切り切れたこのように当てもなく宙を漂っている感じで、そこで時間が止まってしまったかのようにでした。今振り返ってみれば、そのような魂の抜けた状態であることも、次のステップを踏み出すためには必要な時間であったと認識できるのですが、当時は一歩も前に進めずにいる自分に苛立ちや焦りを感じることも多かったように思います。やはり、時の流れ、人との出会い、そしてさまざまな出来事に遭遇することも、自分の力や思いでどうにかなるものではないのです。折りながら待つ、そして時が与えられたときに即座に行動することが大切なのでしょう。

核兵器は、なくなるとどこか年々増え続け、私たちの日々の生活を脅かしています。核兵器廃絶のために懸命に働いておられる多くの方々の思いとは裏腹に、世界は核兵器を保持することによって平和のバランスを保とうとしています。それはまるで危うい綱渡りのように私には思えるのです。きっかけさえあれば簡単に崩れてしまう、かなりの危険性をもった状況のただ中に私たちは生きています。それに加え、近年のテロリストによる世界各地での破



#### ジョー・オダネル Joe O'donnell

1922年、米ペンシルベニア州ジョーンズタウンに生まれる。1941年、米軍の海兵隊に志願。現像・撮影の訓練を受け1945年、占領軍のカメラマンとして来日。広島、長崎をはじめ各地の空襲による被災状況を記録。1946年、帰国後除隊。1949年、アメリカ情報局に籍を置き、ホワイトハウス付きのカメラマンとして勤務。4代の大統領に仕える。1968年退職。1989年、「Once」との出会いにより、反戦・反核の活動を展開していくことを決意。日米はじめ世界中で写真展・講演会を開催する。2007年8月9日、85歳で死去。

#### 坂井貴美子 Kimiko Sakai

1960年、福島県会津若松市生まれ。1993年、若松栄町教会で開催された写真展でジョー・オダネルと出会う。1995年に渡米し、1997年にジョーと結婚。2007年に死別。現在は芸術の世界で仕事をしつつ、夫の遺志を継いで各地で写真展を開催している。

### 神様のファインダー——元米従軍カメラマンの遺産

2017年 8月 9日 発行

2017年 9月30日 3刷

編 著 坂井貴美子  
写 真 ジョー・オダネル  
印刷製本 シナノ印刷株式会社  
発 行 いのちのことば社フォレストブックス  
〒164-0001 東京都中野区中野 2-1-5  
編集 Tel.03-5341-6924 Fax.03-5341-6932  
営業 Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921  
e-mail support@wlpn.or.jp

Printed in Japan ©2017 Kimiko Sakai  
聖書 新改訳 ©1970,1978,2003 新日本聖書刊行会  
ISBN 978-4-264-03387-5

落丁・乱丁はお取り替えいたします。  
本社の無断複写（コピー）は著作権法律上での例外を除き、禁じられています。

壊行為が珍しくもないニュースとして伝えられている現状を考え合わせるとき、二度と繰り返してはならない過去の出来事が、またそれ以上の惨事が、私たちの身に降りかかってくるのではないかと考えざるを得ません。国同士の権力争いに巻き込まれて傷つくのは、いつの時代も弱い立場にいる市民、父や母、老人、子どもたちです。人間の尊厳を根底から奪う戦争、体を根本から破壊してしまう核兵器の使用を避けるために、今私たちができることは何なのでしょうか。自分ひとりの力ではどうしようもないと諦めるべきなののでしょうか。果たして本当に私たちは非力な存在なのでしょうか。たとえ小さな存在だとしても、何かを始めるときに時は動き出します。小さな小石を池に投げ入れたときに波紋が生じるように、たった一人の行動であっても、それは周りの人々に波紋を投げかけます。ですから、私も自分なりに活動が続けていくつもりです。ジョーが投げ入れた小石の波紋が私を突き動かしているのですから。

二〇一七年 七月

坂井 貴美子